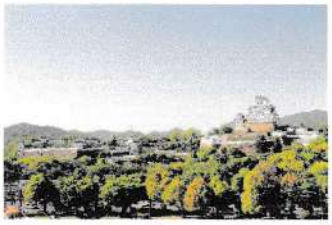
配布資料

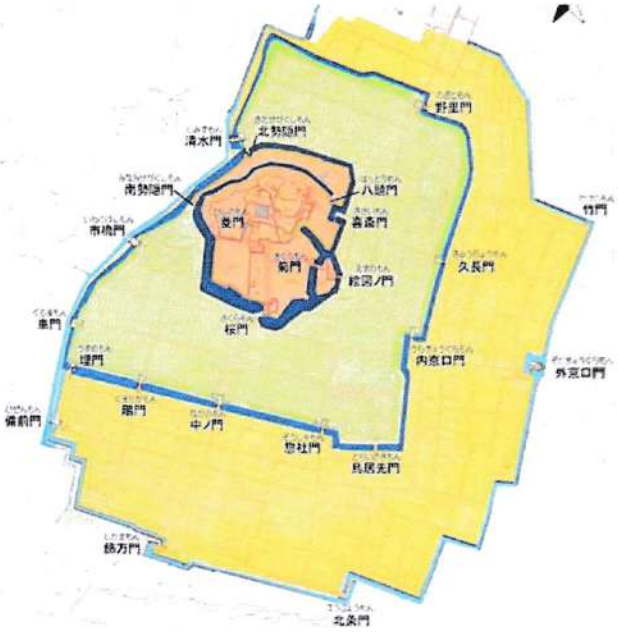
令和４年９月24日

姫路観光ボランティアガイドの会

《ＪＲふれあいハイキング》

城の大きさを実感する
姫路城・３重の堀をめぐる街なか歩き

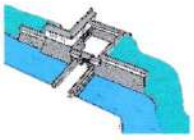




姫路城は、天守が築かれた標高 46mの姫山とその西側にある鷺山(ｻｷﾞﾔﾏ)を中心とする小高い丘の上に築かれた平山城で、天守の北東を起点に、左回りに「螺旋型(ﾗｾﾝｶﾞﾀ)３重の濠」で周囲を取り囲む総構えの城である。「姫山の天守」と「鷺山の西の丸」との全景が、美しい白壁と相まって、白鷺が羽を広げて舞う姿にたとえ、「白鷺城」を「ﾊｸﾛｼﾞｮｳ」あるいは「ｼﾗｻｷﾞｼﾞｮｳ」と呼ばれている。<資料ｆ参考>

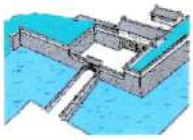
今日は、３重の濠の一部を辿って歩き、姫路城の大きさを実感しよう！

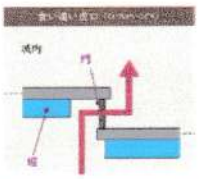
① 総社門跡



総社西門筋の虎の口(ﾄﾗﾉｸﾁ・城の出入口)にあったのでこの名が付けられた。御番所心得の一つに、「御門は暮れ六つ(午後６時)に閉め、くくり戸あけおき、五つ(午後８時)くぐりともに閉め、明六(ｱｹﾑﾂ)打候はば、ただちに番所の戸を開くべく候」とある。門の出入りは、身分･所属･名前を確認したうえ通行が許可された。女性の通行については、主人の手形を持っている者に限り認められた。総社門は、姫路城中曲輪(ﾅｶｸﾙﾜ)の南部に設けられた５城門の１つで、現在、国道２号線が走っているところに中濠があった。外門と内門で枡形(ﾏｽｶﾞﾀ)を形成しており、総社門の石垣は、姫路市民会館前の北側に今でも一部残っている。<資料ｃ・資料ｆより>

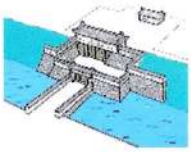
② 内京口門





東南方の虎の口で現在の賢明女子学院の裏手あたり、外京口門とともに京都方面の出入り口だったことからこの名がある。堀は食い違い(右図)になっており、門前の土橋は駐車場になっている。外と内に門を構えて枡形とした、両門とも南向きに建っている、外門は高麗門(ｺｳﾗｲﾓﾝ)、内門は櫓門(ﾔｸﾞﾗﾓﾝ)、外門の内に番所があったという。内京口門から東に500mほど離れた外濠に外京口門が設けられていた。<資料ｃ・資料ｆより>

③ 久長門跡



久長町にあって、濠には車１台どうにか通行できる久長橋が架けられており、今も残る門跡の石垣を抜けて姫路城へ通じている。内外両門を以て枡形をなし、両門とも東向きになっていた。外門は高麗門、内門は櫓門、外門内に番所があった。門から中は侍屋敷(当会のパンフ参照)であった。<資料ｃより>

④　喜斎門跡

住宅に裏口があり、ビルに通用口があるように姫路城にも裏口がある。表口の「大手」に対し、裏口を「搦手(カラメテ)」と呼ぶ。姫路城の守りは、裏口だからと言って決して疎かにしておらず、まず城東に位置する堅固な喜斎門(キサイモン)を突破しなければならない。

現在、搦手を守る「喜斎門」は石垣のみとなっているが、江戸時代には「櫓門」だった。また、その内側の「東三の丸」に土塀を引き廻し「喜斎門」の西に築かれた「喜斎門西門」との間を枡形とした。また「喜斎門」に攻め寄せた敵は、門前に架けられた逃げ場のない屈曲した長い土橋の上で、「喜斎門」の櫓門や三方の土塀の「狭間」から容赦のない攻撃を受け、大きな損害を受けることになる。<資料bより>

⑤　勢隠曲輪

天守閣と西の丸の北面に三日月型をした勢隠曲輪(セガクシクルワ)がある。勢隠の東入口には、「八頭門(ハットウモン)」があって搦手門に繋がっている。北には「北勢隠門」、南には「南勢隠門」があって、それぞれ入口を固めている。攻め手が「大手門」と搦手の「喜斎門」のいずれかから攻め込んでも、すかさず「南勢隠門」あるいは「八頭門」から隠兵力(約 500 人)が出撃し、側面から奇襲攻撃をかける仕組みだ。勢隠は、螺旋状縄張り(ラセンジョウナワバリ)とともに姫路城の特色となっている。<資料dより>

⑥　桜門橋

江戸時代の「桜門橋(サクラモンバシ)」は、長さ約 23.7m、幅約 5.6m の木橋で、両側に欄干があり、青銅製の擬宝珠(ギボシ)6 個が飾り付けられていた。しかし、明治 7 年(1874)、歩兵第 10 連隊の移駐に伴い、一時期、この橋は撤去され土橋になっていた。しかし、平成 19 年(2007)、発掘調査で出土した遺構を活かし、江戸時代の木橋をイメージした新しい「桜門橋」が架けられた。<資料bより>

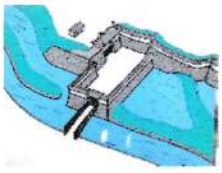
⑦　大手門

姫路城の大手門は、素朴な佇まいながら大手の門らしい重厚な風格を醸しだす高麗門である。大手は本多忠政時代に伏見城から移した「桜門」、「桐二門」、「桐一門」の三門で枡形を造って備えを固めていた。しかし、明治 7 年、陸軍が三の丸に兵営を設置するため壊してしまった。したがって、現在の大手門は、江戸時代の意匠とは異なる門で、かつて、その場に「桐二門」が建っていた。現大手門は「旧桜門」に比べてかなり大きい。<資料e・資料gより>

⑧　シロトピア記念公園

平成元年に市制 100 周年を記念して開催された「'89 姫路シロトピア博」の会場跡に、記念行事の成功を後世に伝えるとともに、より多くの市民・観光客に親しまれる公園として整備したもの。<資料cより>

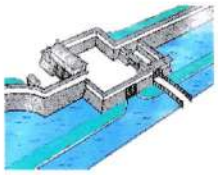
⑨　清水門跡



西側北方の虎の口、直ぐ側にある「鷺の清水(サギノシミズ)」に因みその名が付けられた。船場川内側の北から来た堀と南の三角形の

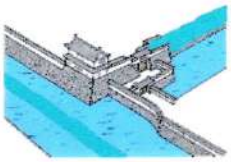
堀との間に枡形を形成し内外両門を構えた。外門は橋の内にあって西向きになり、内門は南向きになっている。<資料ｃより>

⑩　車門跡



「西国街道」の標石(ﾋｮｳｾｷ)の向かいにある「車門」は、中曲輪に置かれた 11 の城門の内、その一つの門である。この門は 2 重の「枡形」と 3 棟の門からなる珍しい形状の「枡形門」である。この門の外門前には荷車が通れる「木橋」が架けられ、西国街道から直接、荷車を引き入れていた。また、池田輝政の築城時には、ここから直接資材を積んだ荷車を運び入れたことから、「車門」と名付けられたと言われている。現在、「車門」から南に流れる中濠は埋められている。<資料ｂより>

⑪　埋門跡



「車門跡」のすぐ南には、「埋門(ｳｽﾞﾐﾓﾝ)」と呼ばれる門跡がある。通常「埋門」といえば、姫路城の「はノ門」のように、内側から土砂などで埋めて塞いでしまうことを言う。しかし、この「埋門」は、どこからどう見ても普通の「枡形門」で埋門的な要素はどこにも見られない。なぜ、このような名前が付けられたのかは分からないが、この門のある場所は、姫路城の「中曲輪」の南西、つまり裏鬼門(ｳﾗｷﾓﾝ)に当たっていることから、「埋」という字を使うことによって、城に入ろうとする鬼たちに「ここが城門ではない」と主張しているのだと言われている。この門は、普段、決して開けられる事のない「開かずの門」だった。
<資料ｂ・資料ｆより>

⑫　中之門跡

かつて「中之門筋」に「中之門」が設けられた。中曲輪南面に設けられた五門のうち中央に位置することから「中之門」と呼ばれた。天守閣から見て南側正面にあたる。江戸時代初期の榊原絵図には「大手門(中濠)」と記されている。この門は、濠に面した幅 2m程の小さな高麗門と、幅 16m程もある巨大な櫓門からなる究極の虎口(ｺｸﾞﾁ)を形成していた。さらに「櫓門」の脇には単層の「櫓」が門前の「土橋」を渡る敵を待ち受けていた。残念ながら「中之門」の石垣は、中濠の埋め立ての際に壊され、今はその一部を残すのみであるが、その石垣の高さからもこの城門が「大手門」の名に相応しいほど巨大なものであったことが想像できる。<資料ｂより>

⑬　家老屋敷跡公園

江戸時代の「中之門」内の大手筋は、「中之門」を入るとその門内で大きく左に折れていたため、今日の道よりやや西を通っていた。この道の突き当たりには、筆頭家老の屋敷が建っていた。幕末には姫路藩酒井家の筆頭家老・高須隼人(ﾀｶｽﾊﾔﾄ)の屋敷があったと伝えられている。平成19年(2007)に行われた調査では、高須家の屋敷の礎石や井戸等、建物の遺構が確認された。この調査によると、高須家の敷地は、東西 135m、南北 75m、総面積は 10.560 ㎡にも及び、その敷地は隣接する白鷺中学校内にまで及んだ。敷地内には表書院や奥向きの書院、そして立派な庭木のある庭園も造られていたようだ。<資料ｂより>

<参考資料>　a) 姫路市教育委員会文化財課・文化財見学シリーズ、b) 姫路ぶらぶら、c) 姫路市・地域資源の全リスト、d) 国宝・姫路城、朝日新聞社編、e) 姫路城情報サイト、f) 姫路城が見える風景写真、g) 城郭検索・姫路城